

2024-8-1
No.1103 500円

思想運動

米兵事件・大浦湾工事で抗議行動	2~3面
国際政治時評:欧米の極右台頭状況	4面
朝鮮外務省3国合同演習に反対表明	5面
反戦平和運動継承する青年たち	6面
関西生コン弾圧に反対しよう!	7面
日本画廊で「山下菊二展」	9面
花岡事件の地に立って	10~11面

7月6日、キャンプ・シユワブで「人間の鎖」行動が行なわれ、フェンス内の米軍に抗議した(撮影:枝川敏夫 関連記事2、3面)



都知事選に何を見るか 未来は現在のなかにしか芽生えない

小池3選はなぜ

都知事選の前、自民党の「真金事件」を追い風にして、立憲は4月の衆院3補欠選挙、5月の静岡県知事選挙まで連勝し、反自民の勢いが目に見えていた。都知事選では現職に新人が勝った先例がない。自公が支援する現職の小池が続けて負ければ、やりたい放題の現状に二石を投じることになるかもしれないという期待もあった。

7月7日の投票の結果は、現職の小池百合子(自公)が約291万票で3選。前広島県安芸高田市長の石丸伸二(自)が約165万票で2位、元参院議員の蓮舂(自)が約128万票で3位と大方の予想を裏切った。新聞社などの調査は、無党派層の4割が小池、3割が石丸、2割弱が蓮舂にそれぞれ投票したという。しかし、小池都政を「あまり評価しない」「まったく評価しない」と答えた人の4割弱が石丸に投票したというから、「小池都政をリセットする」と主張した蓮舂と合わせて、現状に不満を持つ反自公・反小池の票を集めて小池を落とせるといふ当初の読みは、あながち間違っていない。何が起きたかといえは、単純な話で石丸が出て反小池票を割るとして、小池の3選が作り出されたのだ。

若年世代の顔

新聞各社の都知事選分析は石丸の得票に、とりわけ若年層(20代、30代)の投票行動に集中している。今後の10年、20年の期間で展望を持つと

するならば、われわれも若年層の置かれている状況を把握しないわけにはいかない。ある出口調査によると、30歳未満の若者の4割以上が石丸に票を投じたという。それはなぜか。

今の若年層のもっとも切実な関心事は、将来不安の大きい日本社会で、いかに稼いで暮らしていくかである。変化の激しいこれからの社会を「生きる力」(1996年中教審答申)を身につける、さもなくば生きていけないと小池の頃から脅され、それが親や教師の「期待」となって背負われてきた。首都圏では多くの子どもが小学生から受験競争に晒されている。「一軍・二軍」陽キャ・陰キャ」という差別が当たり前になり、それが将来の口ひらき、それが将来の「勝ち組・負け組」を裏打ちする。大学生になっても国家政策で自治活動スペースの撤去や立て看板の禁止など、すべてが不利になることが目的となつていく。しかも学費は年々上がり続け、多くが卒業までに数百万以上の「奨学金」という名の借金を背負わされている。そのたびに聞かされてきた理屈は「受益者負担、つまり学習も研究も私的な利益のためだ」「何のために学ぶのか」という自問も、「社会還元するため」という素朴な正義すらも奪われた。このように人民保護を剥ぎ取られた資本主義社会のなかで「自責任論」を血肉化するまで溶けこせられてきた世代なのである。そんなかれ

らにとつて、格差是正、平した宣伝方法で石丸票として等、人権、少子化対策、反戦・平和という訴えは、目下、あまりにかけ離れた「ささらない」のも当然ではないだろうか。

しかし、これらの社会的不安と不満の鬱積は社会変革への希求の要素にもなり得る。だからこそ多くの若年層は「恥を知れ!」と怒鳴りつけ、石丸の姿を肌身離さず持ち歩くスマホのなかに観て、既得権益を持つ議員らがふんぞり返る市議会で一人闘つ「ヒーロー」という物語を見出した。合わせて、今の閉塞社会を作り出した現政権の自公も、統一教会との真金だのと信用できない。それに真っ向から抵抗できない野党も、真実を伝えない既成メディアもすべてが不信の対象になつていく。そこに来て「行動を起せ」「政治を変えよう」とトリッキーな候補が訴えれば、爽快感と絡みながら街頭演説では「コンサート会場」ながらの歓声上がり、囂るを振られるのは何の不思議もない。

その証拠に排外主義的、新自由主義的な主張を展開する参政党はそれとは相容れないはずの反原発や反ワクチンを全面に出して票を集めている。さらに、それらと真逆のスキャンダルである前明石市長の泉房穂が首長権限を逆手に取ったトラスティックな社会保障拡充政策で圧倒的な支持を得ている。

ただ「手段」と「旗」を

ではわれわれも、敵と同様にICTを活用したポピュリズム戦略で対抗することが可能

だっつか。都知事選の反省のなかからはそういう声も聞こえてくる。しかし、ポピュリズムでは、民衆がみずから変革する機会すら作り出すことができない。強いリーダーの登場と、それによる変革をガチャガチャポンで期待する「水戸黄門」的な世界を克服することはできない。

若年層は本質的には右翼排外主義でもなければ、新自由主義でもない。ただ、眼の前の不条理をもちたらず真の敵と抵抗のための有効な手段を見出し得ていないだけなのだ。そしてそんな不幸な現実を許してしまった責任は既存の運動体の指導部が負つてい

この不幸な現状のなかでわれわれがやるべきことは、みずからの生活と職業を守りながら、階級学説の正確さを確認し続けることである。持たざる者であるわれわれは個人では弱いこと自覚し立って、組織を作り抵抗しないわけにはいかない。そのためには集団的な共通の利害を見出すを得ない。組織がなくて、どんな日常のどんな些細なことでもいい、納得のいかない現実を目の前にしたら、個人でも発言しよう。それで遠慮する者もあるが、近づくと必ずいる。近づいてくる者こそが重要なのだ。そして多数者として、サボタージュやストライキなど、もっとも平和的な実力行使をめざそう。

そんな大衆運動を作り出せずして、敵のポピュリズムに勝つことなどできない。

【藤原晃】